

サンティアゴ・シエラの「つまらないお土産」——バレンシアガ 2023 年夏コレクションショーの舞台とその観客に着目して

藤本流位 (立命館大学)

スペイン出身の現代美術作家、サンティアゴ・シエラ (Santiago Sierra, 1966-) は、観客とパフォーマー、あるいは観客間に差異を生み出す芸術的实践によって知られている。その強引な手法の是非に関して倫理的な批判もあるが、彼の作品は、支配者が人々に強いる苦痛や抑圧を誇張して反復し、観客に対し彼自身が問題視する社会的な歪みを経験的に再認識させようとするものである。しかし 2022 年、シエラがラグジュアリーブランドのバレンシアガと協働し、ショーの舞台として制作した泥を使った巨大なインスタレーションは、彼自身が痛烈に批判してきたグローバル多国籍企業と醜悪に結託しているとして少なからず困惑をもたらした。その後、メキシコシティの Labor Gallery で開催された個展に展示された同実践に関するアーカイブは「キム・カードシアンがショーの最前列から目撃したもののつまらないお土産」であると批判された。

しかし本発表は、この批判に対し、シエラが「つまらないお土産」、つまり舞台の下書きや設営後の無観客の様子を収めた写真の展示を通じ、ショーの観客と、ギャラリーの観客の間に生じる経験の差異自体を問題化しようとしていたと考えている。ここから本発表は、バレンシアガのコレクションショーから、Labor Gallery の展覧会までをシエラの一連の芸術的实践として捉え、このショーの主要な来賓であるセレブリティに焦点を当てる。それにより、コレクションショーがいかにセレブリティの存在を構築しているのか、「つまらないお土産」がいかに観客間に差異を生じさせるのかを明らかにする。2000 年代以降の現代美術の文脈、とくに観客の存在に関する文脈において、シエラの作品は、社会的、経済的なマイノリティに注目して解釈される傾向にある。これに対し、本発表は、シエラの作品を社会的、経済的に優位なセレブリティに注目して解釈する。

まずは、バレンシアガのディレクターを務めたデムナ・ヴァザリアの実践を参照し、それがいかにシエラの芸術的实践と重なるのか、異なるのかを論じる。そして、2023 年夏のショーに着目し、かれらが「泥」という素材を選んだ経緯とその特徴について検討する。さらに本発表は、ナンシー・フレイザーの「パースペクティブ的二元論」を援用し、ショーの観客の経験が、かれら自身の文化的な価値付けに資するものであったことを明らかにする。この文化的な価値付けは、極めて高価な衣服を着用し、それを泥で汚すという観客自身のパフォーマティブな行為を通して成立しうる。しかし、シエラの一連の実践は、バレンシアガやセレブリティの戦略に加担するだけのものではない。その後に提出された「つまらないお土産」は、この文化的な価値付けを明示し、ギャラリーの観客に対し、自分たちが経験し得ない世界の存在を改めて示唆する装置として機能するものとなる。